

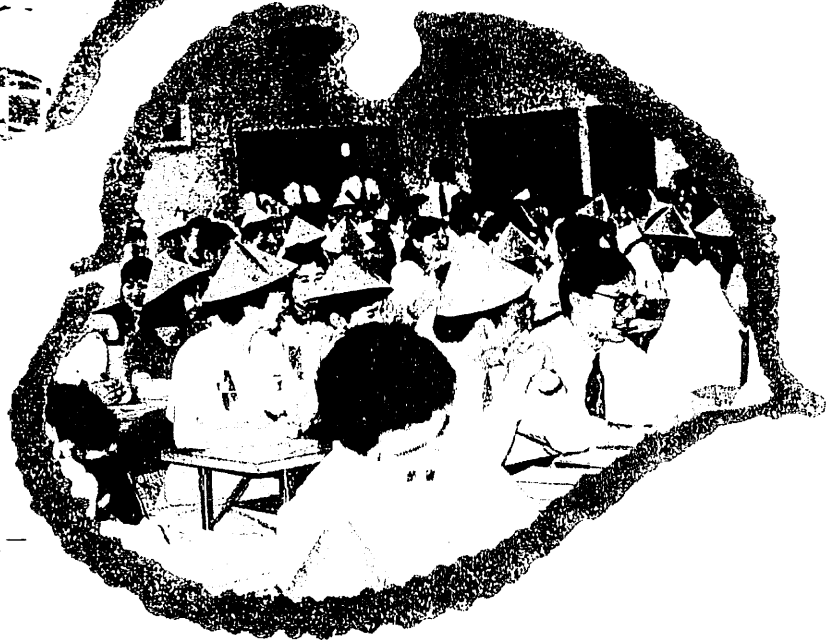


教育の原点を求めて

特別養護老人ホームを訪れ
「人生の先輩」と語ってみる
—高等学校初任者研修講座—

国際理解の推進

楽しみながら異文化に触れ
国際意識を深める「インター
ナショナル〇×クイズ」
—中学校教職経験者(5年経過)研修講座—



教育センターだより

◇ — も く じ — ◇

- ・今年の研修講座から..... 1
- ・新教育センターの建設構想 その2..... 2
- ・「私の研究歷程」次長 谷口賢一郎..... 4
- ・秋田県教育研究発表会の案内..... 6
- ・プロジェクト研究の紹介..... 6

秋田県教育センター

〒010-14 秋田市仁井田緑町4番2号
 TEL 0188(32)3594
 0188(33)0959(教育相談)
 0188(32)0831(教育相談)
 FAX 0188(32)3594
 パソコン通信0188(36)3462
 ID=120 PASSWORD=AEC120

新教育センターの建設構想 その2

前回のセンターだよりでは、新教育センターの概要をお伝えしました。今回は、センターの研修の中で最も利用する機会の多い講堂などの研修室の様子を詳しく紹介します。

また、いよいよスタートした建築工事の現状も併せて紹介します。

1 講 堂

最大500名までの研修や研究会ができるようになります。現センターの講堂は最大150名までの収容ですから、3倍以上の広さになります。

また、最新型の大型ビデオプロジェクタや一人ずつのメモ台付きいすを設置しますので、従来この規模の講堂にありがちだった「投影スクリーンが小さい」「筆記のためのテーブルがない」といった不満の解消を図ることができます。

ビデオプロジェクタは、ビデオやパソコンの情報を投影できるほか、講師が提示する資料も220インチスクリーンの幅いっぱい拡大して表示することができます。明るい画面表示とあいまって効果的なプレゼンテーションが期待されます。

ステージを備えているこの講堂は、センターの講座で利用するほか、公開講演、秋田県教育研究発表会、教育関係の各種大会、さらには児童生徒の研究発表会などでも利用していく予定です。

2 大研修室

現センターにはない新しいタイプの研修室です。最大100名（2人掛けデスク50）までの研修や研究会に対応します。

パソコン画面やビデオ映像の送受信を行うマルチメディア端末を設置し、それらの画像を拡大表示するためのビデオプロジェクタや、4台の大型TVを備えます。これらのAV機器は、講座の中で資料提示のために利用するとともに、受講者自身が活用していくことも計画しています。

また、小・中規模の各種研究発表会や教育関係の大会で利用していく予定です。

3 中研修室

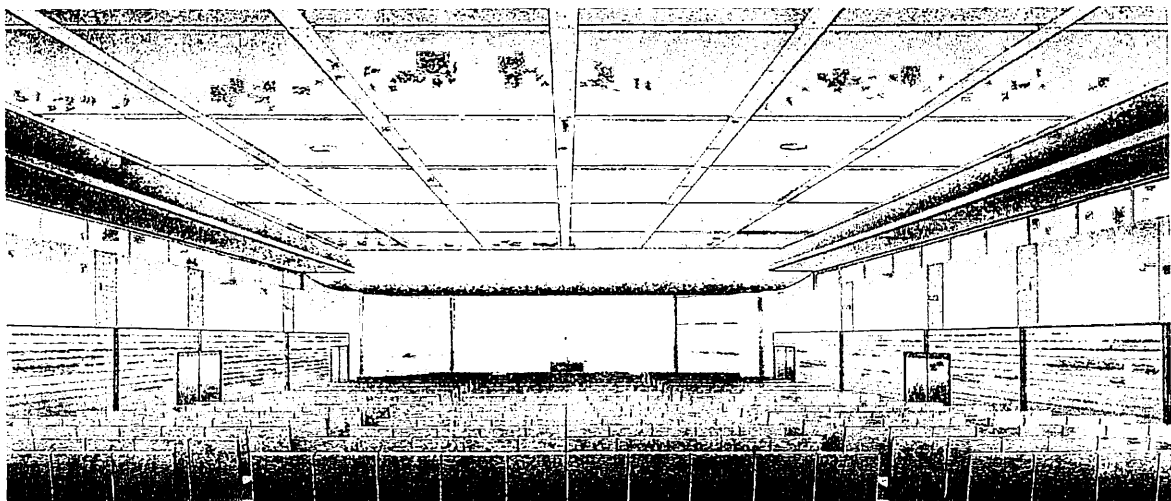
50名程度の研修に対応した中研修室を各階に1室ずつ計3室設けます。大研修室と同じくマルチメディア端末や大型TVを設置し、各種の情報の有効活用には便宜を図っています。また、従来からのチョーク黒板のほかに、ホワイトボードや電子黒板を設置し、様々な形態の研修に対応できるようにしています。

一般の講義のほか、協議や演習を伴う研修にも幅広く利用していく予定です。

4 小研修室

30名程度の比較的少人数の研修を行う小研修室を5室設けます。

このうち1室はLL教室とアコーディオンカーテンで仕切られた円卓形式の造りになっていて、会話するのにふさわしい部屋になっています。



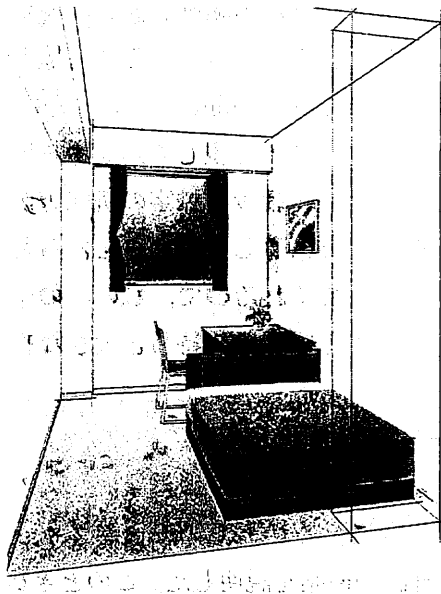
〈 講 堂 〉

また、1室は家庭科関係の諸研修や書写研修を行えるよう24畳程度の和室としました。

今後の国際交流に備え、茶道、華道も行えるよう床の間、障子、炉を配置してあります。座談会などにも最適と思われます。

5 宿 泊 室

個室（洋室）が100室設けられます。このほか身体の不自由な方のための宿泊室も1階に設けられます。受講者並びに講師の方々に快適に利用していただけると幸いです。



宿 泊 室

— 進 む 建 築 工 事 —

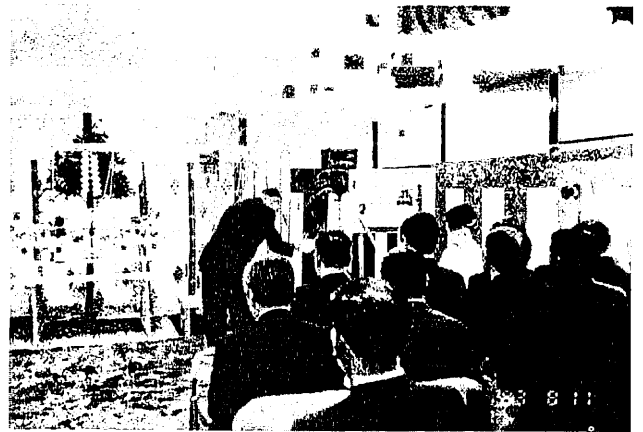
安全祈願祭

去る8月11日、秋田県総合教育センター（仮称）並びに秋田県自治研修所新築工事の安全祈願祭が現地で執り行われました。

当日は、あいにく台風7号が本県に接近中ということで、急ぎよ式場を工事現場事務所内に移しての実施となりました。

参列者は、建築主側として秋田県教育委員会畑沢潤一教育委員長ほか10名、秋田県総務部長谷川壽雄次長ほか7名、秋田県土木部小野一雄営繕課主幹ほか5名、来賓として藤原慶三郎天王町長などでした。教育センター代表者等とともに安全を

祈願しました。



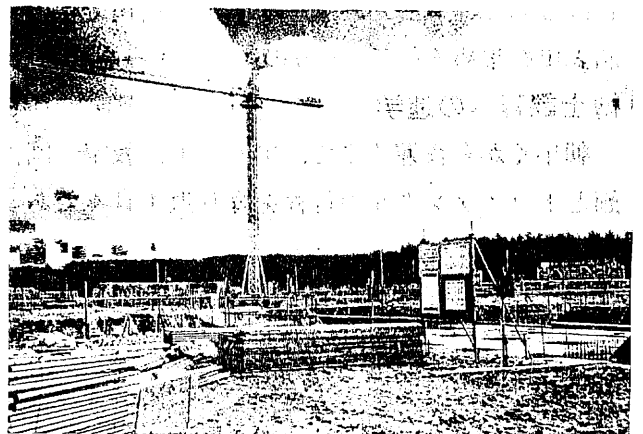
くわ入れをする畑沢教育委員長

建築工事スタート

建築現場での安全祈願祭が無事終了したことにより、「創造性豊かな人材の育成」を図ることを目指した秋田県総合教育センター（仮称）の建設は、平成7年1月の完成に向けて本格的に始動しました。

天王町の工事現場に入ると、目をひくのが、半径50mの可動域をもつタワークレーンで、周囲の緑地やのどかな環境とは対照的な光景です。

これまで、管理・研修棟の第一工区、宿泊棟・共用棟・体育館の第二工区の両工区において、基礎コンクリート打設まで作業工程が無事に終わり建築工事全体では、およそ10%まで出来上がっています。



本格化した建築工事 10月9日撮影

私の研究歷程



次 長 谷 口 賢 一 郎

アメリカ留学

1984年から86年までの2年間は、質量ともに私
が今まで最も勉強したと自負できる期間である。
この間、私はフルブライト留学生として米国ミン
ガン大学に留学していたが、学問のサバイバルゲー
ムという毎日であった。1時間の授業に対して数
十頁の予習をするのは当たり前で、レポートも誰
かの学説を真似て書くのではなく、常に自分の考
えを前面に出した独創的なものが要求された。し
かも大学院生はB以上の成績を取らなければなら
ず少なからず緊張を伴う日々であった。

ミシガン大学で最初はTEFL（外国語として
の英語教育）を専攻した。この専攻では言語学、
音声学、英文法、英語習得理論、社会言語学、教
材論などを学んだが、日本の大学と違う点が多く、
戸惑うことも多かった。例えば、どの科目でも学
期の最初に渡されるシラバスと呼ばれる授業予定
表に、毎時の学習課題、小テスト、レポート提出
日などが事細かに記入されていて、1時間たりと
もおろそかにできなかった。また、教育実習とし
て、米国に来ている外国人に英語を教えたが、生
徒募集に始まり教材作成まで全部自分で行わなけ
ればならず、スーパーマーケットや街角で生の英
語表現を集めるなどかなりのエネルギーを要した。
博士課程への進学

朝早くから夜遅くまで、アパート、教室、図書
館とトライアングルの行程を繰り返す日々であっ
たが、無我夢中で過ごしたせいか、勉強にはあま
り苦痛を感じなかった。2年の予定の修士課程を
1年で終了することができたので、指導教授の勧
めて博士課程に進むことにした。ただ、博士課程
ではTEFLには進まず、日本ではあまりなじみ
のない「言語と識字」を専攻した。当時日本の英

語教育界では読み書きを理論面から取り上げる学
者は少なく、この分野の研究は経験と勘を頼りに
行われていたので、識字を理論的な面からもっと
研究してみようという気持ちが湧いてきたからで
ある。

私の所属するプログラムにはアメリカを代表す
る著名な学者がたくさんいて、彼らの業績や人柄
は学生に大きな影響を与えていたが、中でもブル
ーム教授とスミス教授は私の留学生活を実に有意義
なものにしてくれた。ブルーム教授は読み書きの
研究動向を膨大な数の論文を使い、情熱的に指導
した。また、自らミシガン大学で主催した北米識
字学会では、討論の合間やパーティーでアメリカ、
カナダの一流の学者と親しく懇談する機会を与え
てくれた。スミス教授は識字の研究方法や論文の
書き方をゼミで指導したが、ことある毎に私のレ
ポートを褒めてくれるので、私の心の中にはいつ
しか彼に対する感謝の気持ちと大きな自信が湧い
てきた。

スキーマ理論との出会い

あるとき、スミス教授は授業に二人の若い学者
を連れてきて、そのうちの一人がスキーマ（先行
知識）理論の概略を説明した。このとき私はスキ
ーマ理論に初めて触れたのであるが、読むことは受
動的なものではなく、読み手の背景知識によるス
トーリーの再構築であるということを知り、大
きな衝撃を受けた。それは快刀乱麻を断つが如く、
曖昧模糊とした読解のプロセスを切り裁く斬新な
アイデアに触れた喜びでもあった。

授業が終わると私はすぐに図書館に行き、紹介
された論文を探し出した。それは分厚い論文集に
収まったランメルハート(Rumelhart)の理解・
認識に関するスキーマの働きを書いた論文であっ
た。今まで漠然と持っていた背景知識と読解の関
連が、認知心理学の立場から具体例を用いて明確
に説き明かされていた。

帰国後の論文発表

その後もスキーマ理論に関する論文を時折読ん
だが、本格的に研究したのは帰国してからである。
横手高校に復職して再び英語の授業をしたが、ス

キーマ理論が、文法や語彙だけに拘泥する「木を見て森を見ず」式の授業から脱却し、学習者が全体の流れを予測・推測しながら、主体的に学習するのに役立つことを実感した。

全国の英語教師にスキーマ理論を紹介することが責務と思い、私は英語教育雑誌に二つの論文を発表した。一つは「スキーマ理論を利用したリーディングの指導」(研究社『現代英語教育』昭和62年5月号)で、もう一つは「予測を中心としたリーディングの指導」(大修館書店『英語教育』昭和62年8月号)である。前者では専らスキーマ理論とは何かを解説し、後者ではスキーマ理論を用いて予測を学習にどう生かすかを説いた。また、同年岡山で開かれた全国英語教育学会でスキーマ理論について発表したが、大きな反響があった。私の研究に触発されたわけでもなかろうが、スキーマ理論に関する研究がその後全国的に隆盛になり、今やスキーマは英語教師の必須事項にさえなっている。

テキスト面からの新たな研究

しかし、どの教育理論においてもそうであるように、一つの理論が全てではない。ある面ではその理論は正しいが、ある面では当てはまらないことがよくある。スキーマ理論では読解は読み手のスキーマとテキスト(読みの材料)との相互作用であるとするが、読む材料のテキストにはあまり大きなウェイトをおいていない。テキストがなければ読めないのであるから、読解を正しくとらえようとするれば、当然テキストの研究も行われなければならない。

テキストという問題に直面していたころ、私は秋田県教育センターに勤めていたが、あるとき研究発表をしようとして、いろいろ文献をあさっているうちに、ブリューア(Brewer, W.B.)の「文芸理論、修辞学、文体論」という論文に巡り会った。この論文は、前後の文の自然な結び付き、文の配列パターンなどテキスト全体について追求していた。

私はこの論文に載っている参考文献をもとにテキスト関係の研究を進めたが、チェコスロバキアのプラグ学派の言語学者達が新たな研究の視点

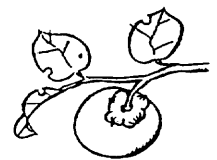
を与えてくれた。彼らのアイデアは機能的文眺望と呼ばれるが、文の中に心理的主語・述語、旧情報・新情報、情報の大小という概念を持ち込み、普通の文法と異なる観点で文章を読み取ることであった。

研究をまとめて

その後、私は文部省に教科書調査官として招聘されて東京勤めになったが、東京生活はテキストの研究に好都合であった。というのは、東京では丸善を初めとして多くの大きな書店があり、内外の専門書が比較的容易に手に入った。また、国会図書館や多くの大学図書館があり、それらも自由に利用することができた。特に本郷の東大図書館はテキストに関する文献が揃っており、私の研究には好都合であった。

文献による研究だけでなく、私は教科書の分析や当時教えていた大学の授業で得たアイデアを基にさらに考察して、年に数篇論文を英語教育雑誌に発表した。そのような折り、私の研究に常日頃関心を持っている友人から、読解の研究をまとめて一冊の本にしたらと勧められ、今まで発表した論文に、何篇かの書き下ろしを加えて一冊の本として上梓した。原稿を完成するまでに約一年を要したが、この間は、土日をほぼ全て費やしてパソコンに向かった。このようにしてできた本が『英語のニューリーディング』(大修館書店)である。西武ブックセンターや紀伊國屋書店の書架に並ぶ自分の本を見て、嬉しさと同時に一抹の不安を感じたが、幸い英語教育雑誌の書評や読者からの励ましのお便りを頂戴し、安堵した。

今年の4月、私は文部省をやめて再び秋田に戻ってきたが、識字研究の奥深さには相変わらず魅了されている。読みに関する理論や技術は拙著に網羅したつもりであったが、今読み返してみると、取り上げの浅い箇所や取り残したテーマが数多く見い出される。今後は一般的な英文だけでなく、パンフレットのような身近な英語を読むことや、情報に焦点をあてた文章分析をテーマにさらに邁進したいと思っている。



御案内

秋田県教育センター主催

第 8 回 秋 田 県 教 育 研 究 発 表 会

○ 期 日 平成 6 年 2 月 15 日 (火) ・ 16 日 (水)

○ 会 場 秋田県生涯学習センター
秋 田 県 児 童 会 館



記念講演

演題 「独創性を生かす教育」

東北大学 総長 西澤潤一

○ 日 程

第 一 日	10:00	11:00	12:00	13:00	15:45
	受付	教育研究奨励賞授賞式 教育研究発表会	教育センタープロジェクト 研究発表	昼食・休憩	分野別分科会

第 二 日	9:30	12:15	13:15	15:00
	受付	分野別分科会	昼食・休憩	記念講演

○ 参加申込 12月上旬「第2次案内」を各学校等へ配布します。

プロジェクト研究の紹介

秋田県教育センターにおいては、3つのプロジェクト研究について、2月に行われる秋田県教育研究発表会でその成果を発表するとともに、冊子にまとめて各学校に配布することになっています。3つの研究の概要は次のようになっています。

「学力を高める指導の在り方」

社会の急激な変化は学力観に大きな見直しをもたらした。とりわけ、知識や技術はもとより、自ら学ぶ意欲、思考力、表現力等の一層の重視が求められている。本研究では、これらの新しい学力を各教科の指導例をもとに具体的に探ってきた。

「環境に対する豊かな感受性を育て

主体的にかかわる環境教育の在り方」

地球的規模の環境問題は世界各国共通の重要課題となっている。地球環境保全のために、学校教育に求められている環境教育の課題と方向について研究成果の一端を示したい。

「新しい人間観に立つエイズ教育」

学校教育において新しい人間観を機能させることが、エイズを本質的に予防する、との考えに立ち、各校種及び各教科・領域におけるエイズ教育の可能性を探ってきた。